

## 屋敷町と文化人ゆかりの地の2つの顔



尾張屋清七の「江戸切絵図」

番町にいて番町しらず  
 明和2年(天保11年)の川柳集『誹風柳多留』に「番町を魚のさがるほど尋ね」という句があります。屋敷を探しているうちに、届け物の魚の鮮度が落ちるほど時間が経過してしまふという意味で、江戸時代、番町は迷いやすい場所として有名でした。  
 1590年(天正18年)

徳川家康が入府した際、西側の守りを固めるために、この一帯に大番組に属する旗本たちを住まわせたことから、「番町」という地名が生まれました。  
 この時、一番、二番、三番：といった地番がかなり適当に配置され、「番町は小路多く、やしきやしき尋ねにくき所なり、表裏何番とはいえず必ずその表裏隣つにもあらず」

## 旗本で栄えた武家屋敷町

と地誌「江戸砂子」に指摘されたほどです。

他にもこの地域が起伏に富み、見通しが悪かったことや、現在の公務員にあたる大番組の転入出が盛んで、住人が頻繁に入れ替わっていたことも、迷い道の原因とされ、いつしか「番町にいて番町しらず」という言葉が生まれたそうです。



上二番町にあったビゴアの自宅(ビゴア画)

## 文化人に愛された町

明治の頃から、その閑静な屋敷町のたたずまいは、多くの文化人を惹きつけます。

一番町には日本を代表する作曲家・滝廉太郎をはじめ、作家の武者小路実篤、高浜虚子、大杉栄などが住んでいました。日本の女性作家第一号といわれる三宅花圃と夫・雪嶺は二番町に居を構えており、永井荷風や国木田独歩らは三番町の住人です。

四番町には「世界のプリマ」と呼ばれた声楽家の三浦環、与謝野鉄幹、晶子夫妻ら、五番町には泉鏡花や内田百閒といった小説家、フランスの風刺画家ビゴーらが一時を過ごしています。

そして六番町では、島崎藤村、有島武郎、菊池寛、アララギ派の歌人・島木赤彦らが名を連ねます。

このように、多くの文化人に愛され、日本の近代文学や芸術が開花した地といっても過言ではないのが、番町です。



## 町名由来シリーズ①

## 番町

町名の一つ一つには、地域の人々の生活から、歴史的な出来事まで、様々な時代の足跡が刻まれています。特に、私たちのまち千代田区の町名には、江戸城の膝元として、由緒ある町名の由来と、そこに刻まれた地域の変遷が刻まれており、千代田区の魅力の一つとも言えます。

参考資料

『千代田まち辞典』

発行/千代田区民生生活部 定価1,200円  
※区役所ほかで販売しております

坂が多く、瀟洒な街並みで有名な『番町』。樹木が多く、静かで落ち着いたたたずまいは、多くの方に愛されてきました。近年では高層マンションも数多く建てられ、高台の地域では新旧マンションがバランスよく配されています。一方、南に下った通りでは、その時代時代の中で新しい店や施設が軒を並べ、この街の賑わいを知ることができます。

この建替えの狭間にて、本格的和食店を続けている店や、随所に残された歴史的史跡が、番町の人気を支える魅力のひとつです。

街の良さを残しながら、少しずつ変貌する街の表裏のひとつでした。

また私どもの事務所があるのもこの街です。各種不動産のご相談から、棚板・手摺りの取り付け、介護設備の案内に至るまで、親身にお手伝いの店として、一丸となっています。

文/一番町建物 高野